

1. 研究テーマ

『居場所』 ～なぜ、必要になったのか～

2. 研究目的

私たちは夏休みに地域に根づく NPO 法人でサービスマーケティングの活動を通し、地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所というのを学び、そこから、地域における「居場所」について興味を持ちました。今回の研究では高齢者を対象とし、居場所の必要性について明らかにしたいと思い、この研究テーマにしました。

〈研究によって明らかにしたいこと〉

- ① 地域に居場所が必要になった背景
- ② 現状として、ネットワーク美浜とベタニアホームの経緯
- ③ 居場所の種類

3. 研究方法

- ① 背景は、インターネットや文献を使用して調べる。
- ② ネットワーク美浜、ベタニアホームへ行き、話を伺う。
代表者の方の経歴
NPO として活動するきっかけ
地域との関わり方
について聞き、双方を対照してまとめる。
- ③ 居場所の種類として“生きいきサロン”をとりあげ、サロンについてインターネットや文献を使用して調べる。

4. 研究結果・内容

- ① 〈地域に居場所が必要になった背景〉
 - 元サラリーマンの高齢化が顕著に

仕事以外に人間関係が存在しない。

↓その結果

近所づきあいが少ない、地域へ出る機会がなくなってしまう。

- 施設不足

介護保険制度サービスだけでは地域社会での生活を続けることが困難な人がある。

↓

制度の隙間を埋める地域福祉サービスが必要となってくる。

- 核家族化の進行

身体機能に障害があると外出する機会が減少する。

↓

引きこもりがちになる。

◎では、なぜ、サロンなど気軽に誰もが参加でき、立ち寄れる居場所があるとよいのか？

- ・何か趣味を見つけない、話し相手がほしいなど、些細な理由等でデイサービスを頼まずにすむ。
- ・家に居ても居場所がない、独居生活では一人でやることには限界がある等々で悩んでいる高齢者の方に居場所を提供することで地域社会との関わりを深め、健康・活力を維持し、また、趣味や市民活動等への関心が高めることができる。

◎居場所による効果は？

【参加者】

- ・いろいろな人とふれあうことによって孤独感が消され、閉じこもりの防止に繋がる。
- ・仲間づくりの場となり、日常での支え合いの輪が広がる。
- ・自分の特技や趣味が活かされることで、いきがいや社会参加意欲が高まり自己実現に繋がる。
- ・同じ高齢者や地域のボランティアと関わることで情報交換の場となり、生活に役立つ情報が手に入る。

【地域社会】

- ・地域交流、異世代交流の拠点となり、世代を超えてふれあうことができる。
- ・サロンを通して地域住民の声を聞くことができ、生活上の困りごとや心配ごとに早期に対応できるようになる。
- ・地域の福祉力を高める。

②ネットワーク美浜とベタニアホームの経緯

i. 「ネットワーク美浜」の経緯

ネットワーク美浜代表者である猪口美千代さんは、名古屋にて10年間へ

ルパーとして働きながら地域福祉関係のサークルに所属し地域における高齢者への支援について学んでいた。10年目になった時、旦那さんを亡くし一人になり“なにかしなきゃ”と、ふと思ったのがきっかけで以前から地域福祉関係のサークルで学んでいたことを活かし、自分の故郷である美浜に地元の仲間が集まって楽しく過ごせる場所を作ろうと動き始めた。場所を確保し改修し、スタッフは以前から消費者クラブで共に活動をしていた人たちに声をかけをして集まり、ネットワーク美浜が発足したのである。発足して3年後に法人格を取得し、“助け合いの心を大切にし、困った時はお互いさま”という地域に密着した事業を行い、助け合いの輪を広めている。

ii. 「ベタニアホーム」の経緯

ベタニアホーム代表者の市野つくしさんは以前助産婦を経て看護師として働いていた。定年退職後、ケアマネジャーの資格を取得した。NPOを始めたきっかけは、ケアマネジャー資格取得後“まだまだできる。ヘルパー講習を開講しよう”、友人が訪問介護・訪問入浴・居宅支援センターを始めると同時に法人が必要となり、更に自分を活かし、地域に密着したベタニアホームを発足させたのである。スタッフは大きな施設が嫌になった人や、家族が出来て夜勤ができなくなった人などが自然と人が集まったようだ。

iii. 上記で述べたそれぞれの経緯についての共通点

どちらの代表者の方もNPOを発足させる前に、ヘルパーやケアマネジャーといった資格を通して人と関わってきていて、その自らの経験を生かしてのNPOとなっていることがわかった。きっかけは異なるのだが、同じ目標やビジョンをもつ人たちが自然と集まってスタッフとして働いている点も共通して言うことができる。ネットワーク美浜では持ち寄った材料をもとに昼食を振るまったり、ベタニアホームではスタッフさんにとっても自分を活かす場所となっている。更に、大きな共通点として地域に密着した事業を行って一人ひとりの居場所を作り出し、居場所を通して安心して暮らすことのできる地域づくりの役割を担っているのだ。NPOという行政と地域の間をつなぐ存在には、代表者・スタッフさん・利用者さんの地域に対する気持ちが共通して言える。

③居場所の種類

求められる居場所の姿は、「自分の存在を認識できる」「経験や能力を生かすことができる」「時間を自由に過ごすことができる」「誰もが利用できるいつでも立ち寄れて、いつでも帰ることができる」と考える。

i. 居場所について

居場所には様々な形がある。近くの住民がちょっとしたベンチなどで話をするような自然にできた場所、人間関係が薄い人たちのために喫茶店など食事を目的にしてふれあうところを設ける場や、空き家や自宅を使ってなにか活動をする場、デイサービスといった施設など、その規模はそれぞれである。朝、喫茶店で初めは一人だったのにだんだん知り合いが集まってくる。前もって待ち合わせしたつもりでもないのに、いつの間にかその喫茶店で雑談をすることが日常になっている。また、毎回習いに行っているパソコン教室で、あまり覚えていなくて何回も教えてもらう。それでもお金を払って通うのはそこでコーヒーを飲みながらいろんな人と話ができるからなのだろう。このようなこともその人にとっては大切な居場所になっているのだと思う。

ii. いきいきサロン

気軽に遊びに行けるような場の代表的なものとして「いきいきサロン」が多い。いきいきサロンとは、一人暮らしのお年寄りなど家でこもりがち、話し相手がいない寂しいといった不安や悩みを抱えている方のために自治会館や公民館など、身近な場所に集まって自由に、無理なく、楽しく過ごせる場のこと。そこは、仲間作りの場、出会いの場となり、孤独感がなくなるため楽しみができるきっかけになる。サロンはお茶をして話をするばかりではなく、レクリエーション、ものづくり、旅行なども含まれ、行われている場所によって求められている内容が違ってくる。また、サロンの活動を通して話を聞いていると、何か困っていることや悩み事を聞けるので、早めに気付いて対応ができる。地域としても取り組むことができ、全体でサポートが可能になる。

iii. NPOと居場所

居場所には NPO も含まれている。NPO じゃんけんぼん（群馬県）では高齢者がいつまでも健康で介護を必要とせず、住み慣れた地域で生活するには高齢者がもっとも望む「地域の人々との温かいつながり」、コミュニケーションの機会を提供することとしている。具体的には、高齢者も気軽に行ける半径 1 km 範囲内に「近隣大家族」という拠点をつくり、たまり場としての利用、趣味創作活動、介護予防のための活動などの場を提供している。また寺子屋の子どもたちは、近隣大家族とふれあうことを必要としている。こうした日常的にいつでも立ち寄れる「心の居場所」をつくり、地域コミュニティーを再生することを目指している。

iv. 富山型デイサービス

富山型デイサービスとは、高齢者・身体障害者・知的障害者・心身障害児・幼児を同じ施設で同時に受け入れるという特徴を持っている。身近な高齢者のデイサービス事業所が利用できることから、障害者が住み慣れた地域でサービスを受けることが可能になることや、高齢者と障害者が同じ場所で同時に家庭的なサービスを受けることで、互いに良い影響を受ける可能性があるという効果が見込まれている。また、地域における重要なコミュニケーションの場となっている。

5. 活動先の現状と課題

《ネットワーク美浜》

＜現状＞

平成9年にふれあいネットワーク美浜が設立されてから、これらの事業を行っている。

- 宅老所

毎週月曜日・木曜日・日曜日（日曜日は希望者のみ）の9時30分～15時30分の時間で送迎もしている。利用料は1500円（昼食・珈琲付）。毎回スタッフさんが季節に合わせた料理をもてなしたり、懐メロを歌ったり、折り紙をしたり、普段の一人の時間での悩みや地元の話をしたりして一人ひとりの自由な時間を過ごしている。また、ヤナギやJAへの買い物にも行き、これは利用者さんの要望から始まったことで、買い物に行く利用者さんからは“週2回いいタイミングで買い物に行けて助かるわ”という声が上がっている。利用者さんは奥田・河和に住んでいる方が多く、スタッフさんも同じで地域に密着したNPOである。

- 通院介助、生活支援

病院から依頼されることが多い。介護保険などの制度の狭間で困った人への支援を行っている。

このような活動から利用者さんのみならず、スタッフさんの生きがいの場となっており、また、近くに住む以前セルフ・アゼーリアに行っていた方が遊びに来たり、その方の甥っ子も遊びに来たりと様々な人の居場所となっている。しかし、場所が野間中学校の近くで大学生もあまり通りがかかることがない通りにあることや、宣伝不足という点から認知度の低さが生まれてしまっている。また、地元の人でも場所や存在さえ知らない人が多いのが現状である。

＜課題＞

ネットワーク美浜の課題は、もっと地域に知ってもらいたいということと利用者さんをどのように行動させるかということだ。現状で述べたように認知度の低さが生まれている。地域の方にとっての居場所によりするためにはまず知ってもらわなければならないということで、チラシを作ると同時にお茶会を開くというのはいかがでしょうかという話が出た。ただ“遊びにきてください”ではきっかけがなく、きっかけ作りというお茶会を通してまず場所、雰囲気を知ってもらえればその後も気軽に立ち寄れる居場所となるのではないかと考えた。また、利用者さんをどのように行動させるかについては、一人ひとり自由な時間を過ごす際散歩に誘ってみても特定の利用者さんだけで、あまり身体を動かさない利用者さんへの身体を動かす誘導の仕方についての課題がある。

《ベタニアホーム》

〈現状〉

平成 11 年にベタニアホームができてから現在、様々なサービスを行っている。

- ・ 訪問介護
- ・ 訪問入浴
- ・ 居宅支援センター
- ・ デイサービス
- ・ 訪問看護
- ・ 認知症対応型 いきいきホーム
- ・ ホームヘルパー養成研修 など。

これらの事業は、理事長がすべてをまとめているわけではない。それぞれの事業ごとに任せて業務を進めているため、少しずつ違うところがある。たとえばデイサービスや訪問介護、訪問入浴などは受け入れている範囲が半田市、常滑市、武豊町、阿久比町、東浦町と広いのと比べ、認知症の方を対象としているいきいきホームでは受け入れ範囲は半田市のみである。それは代表がより半田市の地域と密着してサービスを行いたいというこだわりがあるからではないか。

デイサービスやいきいきホームでは、毎月誕生日会を行ったり、公園へ行ってお花見をしたり、野菜作り、音楽療法での歌などで季節感が感じられる予定がたくさん用意されている。それを月ごとにまとめて月報を作っている。これはプライバシーのことがあるので、地域の方々には見せずに家族に配っている。

また、定期的に利用者の家族の方々が集まって話をする機会を作っている。ここでは家族の方が抱える悩みや雑談までたくさんの内容が詰まっている。職員も混ざって話すので家やベタニアホームでの様子、情報を交換し合い、お互い学ぶことができるので「参加してよかった」と感じてもらえる。お茶を飲みに行く感覚で、しかもベタニアは普通の家なので気持ち的にも気軽に行くことができる。

〈課題〉

ベタニアホームは自分たちから地域住民と関わろうということではなく、そこに訪れる利用者をはじめとした利用者の家族やヘルパー受講生など、ベタニアホームにかかわっている方々を大事に、一日一日を過ごしていただける印象を受けた。活動させていただいた時もそのことをとても感じて、だからこそ地域の人とかかわることがほとんどなく、ベタニアホームという NPO 法人を知ってもらうチャンスが少ないと感じた。それがベタニアホームの特色で、居場所を求めてこられた人たちとの親密な関係を大切にされているので素晴らしいと思った。ただ、NPO をもっと活性化させる、住民に知ってもらおうとするなら、少し地域の人と関わることができる機会を増やすことが必要だと感じた。

6、私たちの提案

私たちの提案として地域に居場所がある人を増やすためには、まず既存のNPOにおいては“地域に知ってもらう”ということが居場所を広げる第一歩だと思い、知ってもらうための提案を挙げたい。知ってもらうことで、地域にとってNPOを身近にすることができるのではないかと考えた。更に、NPOがない地域での居場所づくりについて地域の資源を利用する例として公民館を利用したものを提案したい。

i. イベントを開く

ネットワーク美浜の課題でも挙げた“お茶会”のようななにかイベントをやることで知ってもらうのはどうだろうか。地域に密着しているNPOの存在を知らない人は多くいて、その人たちにどこにあるのか・なにをしているのか・どのような人がやっているのかを知ってもらうために、イベントを通すことで気軽なきっかけづくりができるのではないだろうか。ここで、ただスタッフさんだけが動くのではなく、利用者さんにも協力してもらうのだ。人生の大先輩である利用者さんが考えるおもてなしの仕方をするすることで、利用者さんから直接地域の方と触れ合う機会が生まれると考えた。例えば、抹茶でもてなしたり、珈琲でもてなしたり、身体を動かすことが苦手な利用者さんでも人をもてなすということを通して、話し合うこと・準備すること・当日実際に触れ合うことは、生活のメリハリになるのではないか。地域の人との何気ない関わりから、積極的な姿勢で人と関わることへ前向きにもなり得る。また、地域の人にとっては買い物や散歩がてらふらっと寄って世間話をしたり、自分の交流を広げる機会になると思う。地元の人が集まるひとつの場所があることで、コミュニケーションが生まれ、近年薄くなりがちな地域のふれあいが生まれると考えた。

ii. 地域行事に参加する

上記と反対の発想で、地域で行われる行事に参加する形である。ただ、これは行事が行われるときにしか実行できないかもしれない。しかし、存在は知っているけれど…といった人のひとつのきっかけになるのではないだろうか。ひとつの例として、産業まつりや地域のお祭りに参加し、そこでブースを出し、お客さん・市民の人に知ってもらうのだ。ブースで行うことは、団体紹介や上記で述べたようなおもてなしをしてもいいと思う。地域の行事には幅広い年代層が訪れるので、どの年代の人にも理解してもらえるような工夫が必要になってくる。誰でも見やすいパンフレットやチラシを作れば、口コミでも広げやすく様々な人にとってのきっかけとなり得るのではないかと考えた。このように、行政の企画をうまく利用することも地域に知ってもらう手段のひとつである。NPOと行政とのつながりはまだまだ希薄なものであり、NPOから行政へ働きかけることも重要でNPOと行政の協働の実現のためには不可欠だと考える。NPOと行政の協働が実現すれば、制度

の狭間で困っている人にも手を差し伸べやすくなったり、NPOが地域により密着したものとなるのではないだろうか。

iii. 公民館を利用した居場所づくり

ここでは、NPOが存在しない地域における居場所づくりについての提案を述べたい。私たちが考える上で主催者を婦人会や老人会、町内会といった地域に元々ある組織とする。公民館をなぜ利用するかというと、バス停が設置されていたり交通手段もあり、地域の人々が来やすい位置に存在しているのではないかと考えたからである。またなぜ主催者を地域の組織にしたかかというと、地域住民同士で宣伝しあうことで一人でも多くの人に来てもらえるのではと思ったからである。行うことの例えとしては、お茶会とモノ作りである。モノ作りでは、作りながらコミュニケーションを図り、作り終えたらお茶をしながら団らんする。定期的に開催することで定期的に地域交流が生まれることを目的とした。このような場合、公民館で行うことは地域住民が集うひとつのきっかけという役割を担い、その後の地域交流につながっていくものであり地域交流が生まれることによって、地域に住む人を知れて公民館以外で会ったときでも挨拶やコミュニケーションの輪が広がっていくのではと思う。地域交流が希薄になってしまっている近年、日ごろの挨拶が交流の原点となると感じる。同時に子どもにとっても安全な地域へとなり得るのではないだろうか。地域組織における宣伝は口コミや回覧板を通して行うことができ、地域全体に宣伝することが可能である。NPOが存在しない地域における居場所づくりは地域にある資源をどのように使うかが重要となると考えた。

以上の提案を述べ、地域において高齢者の居場所を増やすためには、地域とNPOとの結びつきや行政の企画の利用、地域資源の利用が最も大切であると研究を経てまとめることができた。また、地域に居場所があるという安心感から自らの生きがいを見つけたり、人と関わることで引きこもりがちな生活から積極的に行動できるような精神になれるのではないか。居場所の存在によって行動様態に積極的な変化が期待されることから、地域の居場所の必要性を考えることができた。

以上